



KGXしよら!
校内活動シリーズ③



学内活動シリーズ3 リーダーシップ

目次

1	ビジョンを持つ	2
2	リーダーシップの原則	4
3	リーダーの資質	5
4	リーダーの責任	7
5	リーダーの危機と成長	11
6	旧約聖書におけるリーダーシップ	14
7	Q&Aこんなときどうする？	21

K G K運動は、組織である前に有機的運動体です。ですから、主によって召し出されたひとりひとりに、この運動の現在と未来がかかっているのです。

神の御業は主に従う忠実な人々を通して進んでいきます。

「リーダーシップ」は、単にグループのリーダーや役員のみが学ぶべきことではありません。学内活動に重荷をもつすべてのキリスト者が、受け取るべき姿勢なのです。

I

ビジョンを持つ

主はいつも信仰に生きる人々にビジョンを与え、ご自身の使命を遂行されます。ですから信仰に生きる人とはビジョンに生きる人ともいえます。「幻がなければ、民はほしいままにふるまう」（箴言 29 章 18 節）のです。正しいビジョンは正しい使命感から生じます。使命が与えられていない、あるいは使命感をもたないキリスト者は存在しないはずです。主を信じた瞬間から、あなたには使命が与えられているのです。いやむしろ、あなたの生まれる前から、神はひとりひとりに特別の計画をお持ちです。なぜなら、神によって造られた者には、誰一人無用な存在はなく、ひとりひとりにすばらしい賜物が与えられているからです。

キリスト者学生の使命には、「文化命令」（創世記 1 章 28 節）としての学問研究と、「大宣教命令」（マタイ 28 章 19 節）としての学内伝道のふたつがあります。ここでは特にその後者のビジョンについて考えていくことにしましょう。

今いる学校は、第 1 志望だったのでしょうか、あるいは仕方なく、不本意に入学したと感じているのでしょうか。自分の目から見ると、自分で学校を選んだように思えるでしょう。しかし、キリスト者である学生にとっては、神が今の学校に遣わされたのだ（第二コリント 5 章 20 節）と受け取るべきなのです。伝道者に限らずすべてのキリスト者は、それぞれの持ち場（家庭・地域・学校・職場等）は、神から遣わされたところであり、そこにおける主の「和解の務め」がゆだねられているのです。先に救いの恵みにあずかった私たちが、主の絶対的主権に信頼しつつ、大胆に主の福音を宣教していくということは、学校という場も例外ではありません。そこにおいても主の大宣教命令が実現していくのです。

ビジョンを担っていくためには、生きた信仰が不可欠です。キリスト者

が最も生き生きとしている時は、主のために生きる時です。主からの使命を受け取り、使命に生きるためには、人生の目的をキリストに置き、キリストを中心として生きること、すなわち「献身した生活」が必要です。献身は、すべてのキリスト者の、キリストとその福音の恵みに対する当然の応答なのです（ローマ 12 章 1～2 節）。

KGK の働きは、敗戦直後の荒廃した大学の中における、一握りのキリスト者学生たちから起こった霊的運動です。その小さな、しかし大胆な一歩から、全国各地の大学の中に、主を礼拝する群が広がっていったのです。主がビジョンを与えられ、主がそれを実現していきます。私たちはそのことを、KGK の歴史を通して知る事ができるのです。

ビジョンを受けた私たちは、それを後輩に継承していく必要があります。大学での働きは、2 年から 4 年を経ればほとんどの学生が卒業していくことを考えると、ビジョンの継承はきわめて重要なことであるといえます。ひとつの運動が、長年続き、構成員が交代していくと、やがて初代の人々に与えられたビジョンが形骸化し、霊的生命を失い、死んだ組織しか残らないということにもなりかねません。

しかし、キリスト者のビジョンとは、本来は人から引継ぐものではなく、ひとりひとりが直接的に神から受け取っていくべきものです。聖書に基づく霊的な経験と、信仰の刷新がなければ、運動の生命は長続きできません。そして、そのような信仰にある恵みを新しく受け続けるために、大きな助けになることが、他のキリスト者との人格的交わりの経験です。ですから、リーダーである上級生の責任は重いのです。リーダーが下級生のために時間を割き、人格を通して霊的影響力を与え、ともにみことばを学び、証しすることによって、下級生には大きなチャレンジが与えられるでしょう。そしてこのことが、エリヤのふたつの分け前を主に求めたエリヤのように（第二列王記 2 章 9 節）主への信仰の刷新とビジョンを真剣に求める動機となることが多いのです。

ビジョンを受け、ビジョンを生き、ビジョンを伝えていくことが、KGK 運動を支え発展させていくのです。ですからリーダーは、よくこのことを心に留めておくべきです。

2

リーダーシップの原則

KGKの働きは霊的な働きです。当然、そこでのリーダーシップも霊的であるはずで、主イエスはご自分の模範を示して、キリスト者のリーダーシップの原則を教えられました（ルカ 22 章 24～27 節）。この世のリーダーたちは、統率力や人間的影響力、あるいは特別な能力によって人の上に立とうとします。しかしキリスト者のグループのリーダーは、むしろ逆に、人の下にしもべとして仕える姿勢が要求されます。学内や地区において、KGKのさまざまな責任を担う者は、リーダーとしてのこのような姿勢を、まず心にしっかりと刻む必要があります。リーダーは自分の属するグループに対して責任を負っているのですが、それは単に活動に対するものではなく、むしろそのメンバー、すなわち「人」に対する責任です。メンバー各自がより深く主を知り、主のみこころをわきまえ、主に献身していくようになるために、彼らを励まし、助け、とりなす務めをゆだねられているのです。

そして霊的なリーダーシップの権威や信頼は、リーダー自らが他の人に主張したり、強制的に要求して得るものではありません。むしろリーダーが他のメンバーにどれだけ真実に仕えていくかによって、他から認められ、与えられていくものなのです。

また、リーダーの責任は、人に対してよりも、むしろ神の御前に負うものなのです。リーダーとなる者は、「この責任は神が自分にゆだねてくださったものだ」と信じる信仰が必要です。

リーダーがその奉仕の期間を終えるとき、神と人の前に忠実なしもべとして認められる人は幸いです。

3

リーダーの資質

リーダーの務めは、学内において霊的な戦いを進めていく責任を負っています。ですからリーダーの第一の条件として、罪から救われて新しく生まれたキリスト者であることが不可欠です。クリスチャン・ホームに育ったとか、長い間教会学校に通っていたとか、あるいは知識としてキリスト教の教理を知っているだけでは不十分です。明確に新生を経験したキリスト者であることが、基本条件でありリーダーの資質の前提でもあります。

そしてリーダーはキリスト者として成長し続けることが必要です。すなわち、日々主に従い、学内活動において自分が主によって学内に遣わされている自覚と重荷を深めていくことです。この働きは単なる人間的な情熱や意志によっては続けていくことができません。そこがKGK運動が他のサークル活動と異なる点です。たとえ一人しかいなくても、また多くの問題に直面していても、いつも新たに聖書から慰めと励ましを受け取ることによるのみ、この使命に込めていけるのです。

リーダーの資質については次のようにまとめることができます。

1. 神との関係

リーダーにとって何よりも大切なのは、自分の能力、知識や経験、熱心さなどの、自分の持っている何かを根拠にする自信ではなく、神への信頼です。神は自分をも用いることのできるお方であるという信仰こそ、第一に重要なことです。このような信仰に生きるためには、日々「静思の時」（聖書を個人的に読み祈るとき）を持つことが必要です。その上で、生活全体を通してキリストにある生き方を証ししていくならば、神を信頼すること

の祝福を実体験することができます。また、毎週の主日礼拝は信仰生活の土台です。KGKの学内宣教は、教会生活で養われ祈られたひとりひとりが教会から学校に遣わされて行う、キリストのからだ（教会）の枝としての働きなのです。

2. 自分との関係

たとえリーダーとしての能力、知識、経験において不十分であったとしても、主に対する積極的姿勢、すなわち、主に仕えたい、他の人に仕えたい、そして主の訓練を受けたいと心から願う思いがあるならば、それで十分です。若いときには、いろいろな面で欠けているところがありますが、主にお取り扱いを受ける経験を通して私たちは成長するのです。ですから、自分勝手な判断によって、奉仕の責任を担うことを避けようとする消極的、防御的姿勢は、信仰生活に喜びと成長をもたらしません。主から受ける訓練を求める、謙遜でしかも積極的姿勢こそ重要なのです。

3. 人との関係

使徒パウロは、キリスト者がどんなに能力や知識や信仰があっても、また自己犠牲に徹したとしても、愛がなければすべてが空しいと語っています（第一コリント 13 章）。リーダーに必要なことは、他に対するきよい関心をもつことであり、忠実にとりなし、心を配るといふ姿勢です。特別な才能やきわだった賜物は、二の次です（ピリピ 2 章 20 節）。グループの交わりに愛があることは、そのこと自体が明確にキリストを指し示す証しなのです。リーダーである人は愛の人となることを求めています。

4

リーダーの責任

リーダーの具体的責任は、次のように多岐にわたっています。

1. 個人への配慮

リーダーはともするとグループの活動や計画に心が捉われ、グループのメンバー個人に対する配慮を忘れて、怠ってしまうことがあります。確かに定例集会は大切ですし、学園祭や伝道会の計画も立てなければならぬこともあるでしょう。しかしそれ以上に優先すべきことは、ひとりひとりの人格に対する配慮です。活動や課題に目を奪われて、「人」が忘れられてはいけません。

リーダーは、キリスト者のメンバーたちが以下の 4 つを大切すべきことを確認し続ける必要があります。

1. 自分や他人のために祈ること
2. 聖書を規則的に読み、学ぶこと
3. キリストの福音を積極的に証しすること
4. 教会にしっかりと根ざし、教会生活をする

リーダーがこれらに対する配慮を怠ると、グループは表面的には活発でも、信仰的には内容のない集まりに陥ってしまいます。特に信じたばかりの若いキリスト者に対する配慮は、リーダーの大きな務めです。霊的に生まれたばかりで、最も助けと導きを必要としているからです。リーダーは

彼らのために祈るだけではなく、時間をかけて継続的に個人的な交わりを続けていく必要があります。若い回心者に信仰生活の手引きをする際に、次のことを心に留めるとよいでしょう。これは、すでに信者としてグループに加わった人に対しても、確認する必要がある点です。長期間信仰を持っているつもりの人でも、これらの基本的な事柄がはっきりと理解できていない場合もあるからです。

1. キリスト者であることの意味

神の前に罪人である私たちは、イエス・キリストの十字架の贖いを信じることによって救われたこと。救われた者は、三位一体の神との新しい関係に入れられ、聖霊に導かれて生きる者とされたこと。

2. 救いの確信の根拠の確認

救われているかどうかの確信とは、主観的な感情によって左右されるべきものではなく、キリストの十字架の贖いによって果たされた神の約束に立脚するものであること。神の約束は聖書に基づくものであること。

3. 日々 静思の時を持つこと

彼らと共に何回か静思の時をもち、どのように聖書を読み、どのように祈るかを具体的に示してあげること。

4. 教会に定着すること

できるだけ早く福音的な教会を紹介し、洗礼を受けるように励ます。教会の交わりに加わらない個人主義的信仰は、不十分なものであることを伝える。

5. 積極的に証しをすること

回心が本当のものなら、証しは自然にできるようになる。しかし、証しの内容や話し方、福音の説明の仕方については、学ぶ必要がある。

6. 成熟した信仰理解を持つこと

何を信じどのように行動するのかを、自分で聖書から判断できるよ

うに励まし、良書を紹介する。

7. 献身した生活をする

信仰が思想においても行動においても、生活の全領域に適用されていく必要がある。結婚や職業選択などの決断についてもイエス・キリストを主とする姿勢をもって取り組むことを勧める。

2. グループへの配慮

リーダーはグループ全体に対してもいくつかの点で配慮すべきです。

第一に、グループの目的意識の明確化と堅持です。KGKのグループは目的のない集団ではありません。学内宣教、信仰の徹底、世界宣教等の目的をもっています。それは各大学活動でも、地区活動、全国的規模の活動でも同じです。リーダーは、グループ全体が常にこの目的を意識し、ここから逸脱しないようにします。新しくリーダーが立てられる年度替わりに、前年度の活動が何のために行われたのか、結果はどうであったのかが十分に吟味されずに、ただ形式的企画のみが継承されることがあります。リーダーが明確な目的意識、すなわち、何のために集まり何を伝えていくのかを理解していないなら、グループ全体も方向性を失い、単に活動のために活動するグループになってしまいます。

第二に、バランスある活動を心がけることです。あるグループは伝道を強調しますが、信者の訓練や成長の面はほとんど配慮されていません。またある場合は、信者の内輪の学びや交わりに終わって、伝道面が極めて乏しいことがあります。自分たちの学内に強い関心があっても、他大学や地区全体、世界的視点に欠けていることもあります。活動の内容と視点において、バランスある配慮が必要です。

第三に、真の交わりを励ますことです。活動が組織的にスムーズに行われていくことだけでなく、グループのメンバーの間に生きた交わりが成長していくことが大切です。組織面のみを考えていると、いつの間にかグループは形式化、形骸化してしまいます。組織としての活動の基礎には真の交わりが必要です。キリスト者のひとりひとりが神のみこころを知り、従う者となるために祈り、励ますための交わり、周囲にいる友人、家族にキリ

ストを証しするために協力する交わりを作っていきます。グループの人数が多くなりすぎた場合、小グループに分けて活動するのもひとつの方法です。そして、真の交わりとは聖書から一緒に教えられ、従うときに深まるものであることを覚えておきましょう。

第四に、計画性を持つことです。グループの活動が、行きあたりばったりであっては実を結びません。多少の柔軟性は大切ですが、年間計画の骨組みは年度の始まる前に作りましょう。特に新入生を招く企画は、十分に祈り、前もって備えておく必要があります。年間計画が有効に実施されるために、1、2ヶ月に一度くらい、話し合い（人数の多いグループなら役員会）を開くとよいでしょう。話し合いの際には、次年度のために正確な記録を残します。いつも主から新鮮なビジョンをいただくことによって、グループの計画がマンネリ化することから逃れることができます。

最後に、核となるメンバー同士のチームワークが大切です。相互の連絡をきちんととって、誰かひとりが孤立、独走しないように、互いのために祈るときを持ちましょう。顧問の先生、地区活動の学生、主事、卒業生などにも連絡を密にすると祈りの輪が広がります。このようなチームワークによって、次期の後継者が育ち、学内活動が正しく受け継がれていくことができます。

5

リーダーの危機と成長

リーダーがもし倒れてしまうなら、それはグループ全体に大きな影響を与えます。ですからサタンへの攻撃はリーダーに対して激しく向けられていることを知るべきです。使徒パウロも、若いリーダーであるテモテに対して、自分の奉仕と同時に自分自身にもよく気をつけるように勧めています（第一テモテ 4 章 6～16 節）。パウロ自身も、人に宣べ伝えておきながら自分自身が失格者にならないように自分を訓練することを心がけていました（第一コリント 9 章 24～27 節）。

確かにリーダーには誘惑や危機が多くあります。しかし、リーダーを経験することを通して、神から大きな祝福を受けることができるのです。魂が柔軟で若い時代に苦しいと思える経験をさせていただけるならば、その試練のただ中における聖書の励ましから、キリストの恵みを深く知ることができます。また、労苦を分かち合う良いキリスト者の友人との交わりも深まり、人格的、信仰的成長がなされます。リーダーが危機に直面した時、それをどのように乗り越えていくのかは、その人自身とグループ全体の分岐点となるのです。

1. リーダー自身の危機

1. 高慢の危機

過度の忙しさのために毎日の静思の時間を怠り、霊的に枯渇しながらも、なお自分が霊的であるようにふるまい、偽善的態度をとる。それによって、神の生きた交わりとビジョンを失う。

2. 自己義認の危機

グループの状態が良く見える時は「自分がすぐれているからだ」と自己過信し、逆に悪く見える時は「みんな自分がダメだからだ」と自己不信に陥ってしまう。その両方とも、自分の力にのみ頼ろうとする自己義認が根である。

3. 強がりの危機

「自分はこのなかにやっているのに、どうして他の人は…」と他人を裁く。また自分の抱えている弱さや失敗、罪などを隠したままで、強がった態度をとる。このような他の人に対する支配的な態度は、自分が孤独になるだけでなく、キリスト者としての仕える喜びと祝福を台なしにしてしまう。一生懸命活動に打ち込んだつもりでも、終わってみると神と友人の両方とも失ってしまうこともありうる。

4. 断絶の危機

学内、教会でバリバリ奉仕に働きまわっているが、キリスト者の間でのみ生活し、未信者の友人との信頼関係を育てることができない。そのため、キリスト者としての証しがほとんどできなくなってしまう。それでも「奉仕をしているから自分は伝道している」と思い込んでしまう。あるいはそのような忙しさのために生活のバランスを失い、学びや家族への責任をおろそかにしてしまう。

2. リーダーの成長

リーダーは個人的にも様々な危機に直面しますが、リーダーの課題はグループの状態にも深い影響を与えます。同時に、リーダーが危機の時にも主を仰ぎ、解決をいただいて成長することによって、グループもまた豊かにされていきます。あなたの成長は、他の人にも益となるのです。

危機を正しく見抜き、成長するために次の点をチェックしましょう。

1. グループの活動が、メンバーの個人生活と切り離されてしまってい

ないだろうか。たとえば、祈り会では活動について祈るだけで、各自の信仰生活の問題について分かち合ったり祈ったりしないことに慣れていないか。あるいは、聖書研究会で学んだことが実際の日常生活に少しも生かされていないということがないか。これでは、学内活動の生き生きとした意味が失われてしまう。そのためには、メンバーひとりひとりが、自分の信仰生活全体を吟味することを励ます必要がある。

2. メンバー各自は少しも個人伝道や証しをしていないのに、グループとして伝道会や聖書研究会をしているのでこれで十分だと思っていないか。確かに個人的に「自分はキリスト者である」と旗を掲げる証しをすることには、大きな恐れが伴うだろう。しかし旗を掲げないことには、どこに求道者がいるかわからない。キリスト者同士で集まって励まし合うのは、外に出て証しをするためである。恐れを率直に分かち合って、行動に移す私たちになろう。

3. 学内宣教という本来の目的を失ってサークル化してしまい、活動が食事や交わり、キリスト者だけの学び会に終始していないか。長い伝統のあるグループとしてグループ存続が自己目的化してしまっていないか。グループに未信者がいない期間が長いなら、それは危険信号である。学内活動の真の目的を確認する必要がある。

4. リーダーが独走したり孤立したりして、メンバーと対立していないか。リーダーは神と人の前に謙遜であり、正直であるべきである。そのために、リーダーは同性のキリスト者で共に祈ってくれる友人、率直に忠告してくれる友人を神に求める必要がある。

このようにリーダーは、多くの危険があることを知るからこそ、主に信頼し服従して歩むことを学ぶことができるのです。

6

旧約聖書におけるリーダーシップ

聖書には、リーダーに召され、応答し、悩み、そして神に用いられた多くの偉大なリーダーの人生が記録されています。この章では、旧約聖書に描かれているリーダーの姿を学びましょう。

リーダーシップには一つの型はありません。あなたには、あなたにできるリーダーシップがあります。

この聖徒たちの中に、あなたと境遇や性格が似た人がいるでしょうか。この人を成長させて用いられたように、主はあなたを用いようとされています。これからのあなたのリーダーシップを、主がみことばによって励ましてくださっているのです。

ノア

与えられた計画に忠実なリーダー

創世記 6-9 章

1. 神と共に歩む

地上に人の悪が増大し神の前に墮落し退廃するとき (6:5、11)、ノアは神と共に歩んでいました (6:9)。時代の影響を受けることは避けられません。しかしその時代がどのようなものであるかを私たちは意識する必要があります。ノアは人々が創造主を無視することを当然とする時代に、家族とともに創造主を見上げる信仰をあらわし続けました。キリスト者のリーダーは、時代の流れに逆行する勇気を持たなければなりません。

2. 神のみことばに忠実である

ノアの箱舟はノア自身の夢やビジョンではありませんでした。箱舟の作り方も、箱舟に入るタイミングも、ノアは「神が命じられたとおりにし」(6:22、7:5、16)、自分の計画にではなく神の計画に忠実だったのです。地の面がかわいたのを見ても、ノアは神に命じられるまで2ヶ月近くも箱舟にとどまっていた (8:13-18)。私たちは神のみこころと思ってはじめても、いつのまにか自分のペースで事を進めようとしてしまいます。しかしキリスト者のリーダーは、神のみこころを自分の思惑にすり替えてはならないのです。

3. 礼拝を導く

洪水が終わり箱舟から出てノアが最初にしたことは、祭壇を築き主に礼拝をささげることでした (8:20)。礼拝とは、神に対して自らすすんで感謝をあらわす行為です。自分の活動に祝福が与えられたときに、それをどのように表現しますか？ 仲間をほめますか？ 打ち上げパーティをしますか？ ノアは「主のために」祭壇を築いたのでした。「主に感謝をささげよう」そのひとことが、言えるリーダーになりましょう。

アブラハム

望み得ないときに信じるリーダー

創世記 11-25 章

1. みことばに従い、みわざを待ち続ける

75歳の時に主のお告げを受けたアブラハムは「どこに行くのかを知らないで」命じられた通りに生まれ故郷を出ていきました(12:1-5、ヘブル11:8)。はじめのお告げを受けてからイサクがサラから生まれるまで実に25年間！アブラハムは100歳になっていました。「およそ百歳になって、自分のからだが生かされても同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。」(ローマ4:19) また、神からイサクをささげるように命じられたときも、それに逆らいませんでした。「彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。」(ヘブル11:19) 彼は自分の人生と家族、子孫のすべてを神への信仰に賭けたのです。

2. 滅びる人たちのためにとりなす

ソドムとゴモラを滅ぼそうとする主に対しアブラハムは6度に渡ってとりなしを繰り返します(18:16-33)。神の計画を知らされている者として罪人の救いのために真剣に祈るリーダーは、神のあわれみを受けるのです。

3. 苦悩と弱さを持ち続ける

サラが不妊症であったことは、夫婦の大きな悩みでした。またアブラハムは妻のサラを妹と偽ってエジプトのパロに差し出し、自分の身を守ろうとします(12:10-20)。彼は晩年になっても同じことを繰り返し(20:1-18)、その自己保身の態度はついには息子イサクに引き継がれてしまったのでした(26:6-11)。しかし明らかにアブラハムの臆病さ、弱さが原因となっている事件さえ、主は祝福の機会としてくださいます。「知れ。主は、ご自分の聖徒を特別に扱われるのだ。」(詩篇4:3)

モーセ

集団を導くリーダー

出エジプト記

1. 召しを確信する

モーセは神から召された時、神を怒らせるほどにその召しをいやがった人物です(3:11-4:17)。召されてからもつぶやき絶望し臆病になり不信仰にさえなりました(17:4、民数記11:10-15)。しかし彼は、神が自分を召して下さったという確信をもっていました。それは、神と顔と顔を合わせるような個人的な交わりを持っていたからでした(33:11)。召しは神との交わりの中で確かにされます。弱さや恐れを持つ者も、そこで力を与えられるのです。何度も民の反抗に遭いながら彼らを治め続けるモーセの忍耐は、そうやって養われたのです。

2. 神のことばを伝達し人々を決断に導く

神がモーセに啓示された律法を民に知らせることが彼の務めでした。自分の願いやわがままではなく、神の戒めを生活全般について忠実に伝達しました。そして伝えるだけではなく決断を促したのです。「私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。」(申命記30:19) モーセの態度は「どちらでもいいよ」というものではありませんでした。民が正しいことをするように説得しようという強い願いを彼は持っていたのです。

3. マネージメントを学ぶ

イスラエルの大集団のあらゆる分野にわたる様々な責任を負って、モーセはすべてをこなすことができず、疲れはててしまいました。しかししゅうとのイテロが彼にマネージメントを教えます(18:13-26)。自分一人で仕事を背負わずに、与えられているよい賜物をみんなで分かち合い、作業を分担するのです。リーダーがどんなに有能であっても、自分ですべてを行おうとすることは愚かです。

ヨシュア

妥協しない2代目リーダー

ヨシュア記

1. 神が力の源であることを知る

ヨシュアは従者としてモーセのすぐそばで、神がどのような方なのかを体験を通して学んでいきました。イスラエルの勝利は人間の力ではなく祈りによって支えられていました（出エジプト記 17:9-13）。神の山で十戒を受けるときにモーセは40日間ひとりで神と交わりを持っていました。ヨシュアは神の前に一人で出ることの大切さを知ったに違いありません（同 24:13-18、33:11）。ゆっくり神と交わる時間がリーダーには必要です。

2. 神を信頼することを主張しつづける

カナンの地に偵察隊12人が送り出されたとき、他の10人は負けるに違いないと判断し、ほぼ全会衆がその情報に絶望し神に信頼することをやめてしまいました。しかしヨシュアとカレブは攻め上ることを主張し、主がともにいて下さることを訴えました（民数 13:1-14:10）。その結果、40年間の荒野の放浪を経て同世代のイスラエルの中で2人だけがカナンの地に入ることができたのです。神に従う時には周囲の大多数が反対しても耳を貸すべきではありません。人の言葉よりも神の言葉を信頼すべきです。

3. 罪の恐ろしさを知る

ヨシュアは、モーセが罪に対してどれほど怒りを燃やしたかを見ました。（出エジ 32:15-30）そしてアカンひとりの罪がイスラエル全体に敗北を与えるという事実を経験しました（7:1、26）。リーダーとして彼は、罪を犯したものを徹底的に罰しました。ヨシュアは晩年、偶像礼拝の罪に関して民に厳しい警告を与えています。（23:1-16）そしてそのおかげで、ヨシュアと同時代を生きたリーダーたちは彼の死後も主に仕え続けました（24:31）。キリスト者のリーダーは罪の恐ろしさを知っていなければなりません。真理のために怒ることが必要な時もあるのです。

ギデオン

確認を繰り返す臆病なリーダー

士師記 6:1-8:35

1. 確信が持てずに何度も召しを確かめる

ギデオンには自信がありませんでした。「勇士よ」と呼びかけられても「私にそんなことができるものか」と答え（6:13,15,17）、主の霊がギデオンをおおい大会衆が彼の元に結集しても、彼は羊の毛で繰り返し主の証しを求めました（6:36-40）。主はそんなギデオンを忍耐深く導きます。主は自信にあふれた者よりも自分の弱さを知る者を用いられるのです。

2. 人数による安心感を奪われる

主に励まされて戦いに向かうギデオンに、主は当初3万2千人いた兵を300人に減らさせます（7:1-8）。ギデオンはまた恐れを感じ、主からの励ましをいただくのでした。神は、私たちの働きの人間的保証を切り崩されます。そして神の力によってしか乗り越えられない状況を与えます。表面的な状況を見て恐れたり失望してはいけません。人間の力が空しくなるときにこそ、神の栄光と恵みがあらわれるのですから。

3. 名誉心が罫となる

ギデオンは分捕り者の耳輪をもらい、エポデを作りました。自分の町にそのエポデを置き、いわば彼は自分の活躍を記念する場所を作ったのです。そのエポデはイスラエルの偶像礼拝の対象となっていきます（8:22-28）。ささやかな名誉心がイスラエル全体に罪を犯させる結果となったのです。ギデオン自身はよいリーダーであり、40年間イスラエルを穏やかに治めていましたが、よい後継者を育てることはできませんでした。70人の息子たちのうちの一人アビメレクは、権力に目がくらんで自分の兄弟たちを殺してしまいます。強力なリーダーシップを持つ人が必ずしも信仰の継承にも成功するとは限りません。むしろ家族にはその人の働きよりもその人の人格が深い影響を与えるのですから。

ネヘミヤ

建て直しに取り組むリーダー

ネヘミヤ記

1. 神の視点から見て行動する

ネヘミヤはペルシャの王宮の高官であり、鋭い観察力、陰謀を見破る鋭さを備えていたはずの人物です。彼はエルサレムの様子を知った時、神の前にイスラエルの罪を告白し、民全体のためにとりなしの祈りをささげました(1:1-11)。彼は自分個人の問題に埋没していませんでした。神の視点からその状況を見て、悔い改めをしているのです。霊的なリーダーは、今の状況を神がどのように見ておられるかを意識します。

2. 明確な目的意識を持って実行する

ネヘミヤは城壁再建という明確な目的を持って、熟慮の末に仕事に着手していきました。リーダーは自分が何をしようとしているのか、明確な目的意識を持っていなければなりません。彼は外部からも内部からも攻撃や反対を受けました。外からは異邦人たちにあざけられ(2:19、4:1-3、7-11)内部からは財産がからんだもめ事がありました。それらに彼は熟考した上で具体的な方策を実行します。暗殺されそうにもなりますが、彼は城壁完成という自分の使命に集中し続けました。リーダーは状況が困難になっても自分の働きの本質を見失ってはなりません。

3. 落胆せずに働き続ける

城壁が完成し後継者も任命し、民には律法の書をはっきり読んできかせ、主に従う決意を新たにさせました(8-9章)。しかしネヘミヤがしばらくエルサレムを離れている間に、町の中にはいろいろな不正や宗教的妥協がはびこっていました(13:1-31)。彼は問題に取り組んでいきます。不評を買うことを恐れずに非難し、神の目に正しいことを行い続けます。キリスト者リーダーは、人々の罪深さに失望してはならないのです。神を恐れ、信頼して、勇気と覚悟をもって主のために働き続ける者でありましょう。

7

Q&A

こんなときどうする？

リーダーは賜物がなければはいけないのではないのでしょうか。私に何ができるのだろうかと不安でたまりません。

リーダーシップにもいろいろなタイプがあります。ぐいぐい人を引っ張る力を持つ人だけがリーダーとして用いられるわけではありません。むしろ、どのような人でも、本当に神にへりくだって従う時に、その人の持ち味がリーダーとして整えられていくからです。旧約聖書におけるリーダーシップのページを見てください。はじめからリーダーの資質を持ち合わせていた人はほとんどいません。不安があって当然です。しかし主があなたを召してくださったのですから、これからも主の導きを信じていきましょう。主はあなたを通してなさりたいことがあるのです。

リーダーとして自分がふさわしいかどうか、自分で先走った結論を出してはいけません。必要な賜物は求めていけばよいのです。神はあなたに必要なものをすべて与えてくださる方だからです。

私はビジョンを持ってリーダーになりました。でもメンバーはみんなやる気がないばかりです。どうしたら彼らは私についてきてくれるのでしょうか。

あなたは自分のビジョンをメンバーにきちんと分かち合ったことがあるのでしょうか。「どうせ話してもわからないのだ」と最初からあきらめてしまっていないですか。人に仕事を任せるのが心配で、自分ですべてのことをしてしまっていないですか。あなたのその不信感が、

メンバーとの間に溝を作っていないでしょうか。もしかしたら彼らは、あなたのビジョンについてこないのではなく、高慢なあなたについていきたくないのかもしれない。

主があなたにビジョンを与え、あなたをリーダーとしてくださったように、メンバーもまた同じ主選ばれてそのグループに与えられた兄弟です。彼らを導いた主に信頼して、あなたの考えていることや必要と感じていることを正直に話してみてください。「やる気がない」という評価はあなたの勝手な思い込みで、彼らはあなたとは違う視点のビジョンや、違う賜物を持っているかもしれません。お互いの意見を交換し、それを聖書から吟味していく中で「あなたに与えられたビジョン」は「グループに与えられたビジョン」として整えられていくのです。「あなたの奉仕」が「メンバーみんなの奉仕」に変えられていくのです。

あなたの持っているビジョンが本当に聖書的で適切なものであるならば、メンバーに話し続け、祈り続けてください。多少の批判があっても、私たちは主の与えて下さる使命に忠実でなければなりません。語り続ける中で孤独を感じることもあるならば、それはあなたが神との深い交わりを経験できる時です。主にあなたの心の願いと思ひ煩いをすべて打ち明けましょう。あなたを支えるのは人ではなく主です。そしてあなた自身は、自分の高慢を警戒し続けて下さい。

メンバーがなかなか集まりに参加してくれません。「都合がつけば行きます」と言って、別の用事を優先させているようです。どうしたら彼らは参加してくれるでしょうか。

彼らは今の活動に魅力を感じていないのです。別の用事の方が自分にとって有益だと思っているのでしょうか。あなた自身はどうですか。あなたは今の活動の中で本当に恵みを受けていますか。あなたのグループは神を見上げることを励まし合う集まりになっているでしょうか。とりなしの祈りが少なくなって、形式的な活動だけになっていませんか。人が集まらないことでいらいらして人を裁き合う雰囲気

気になっていませんか。

人をむりやり義務感で集めようとしても、彼らは逃げて行くでしょう。むしろ今集まっている人たちが、主に信頼した平安を持つことが必要です。集まる人数は結果にすぎません。たとえひとりでもいいではありませんか。あなたがリーダーをしているのは、グループが主と共に歩み主を証していくためでした。あなたがその思いを保ち、神からの祝福を受けていくなれば、主は集まる人を起こして下さるはずですよ。人々はあなたの証しを見て、活動の中におられる主ご自身を求めてやってくるのではないのでしょうか。人を批判する誘惑から逃れて、神を見上げる信仰を養っていただきましょう。

メンバーのやりたいことがみんなバラバラなんです。一致するためにはどうしたらいいですか。

どうしてあなたはメンバーのやりたいことがみんなバラバラだと思うのですか。メンバー全員から聞いたのですか。それとも人のうわさですか。あるいはあなたの勘ですか。みんなで集まって、きちんと話し合ひましょう。ひとりひとりの意見をよく聞き、お互いにどうしてその主張をしているのか、何のためにそれをやりたいと思っているのか、その思いを聞き取り合ひましょう。そこにお互いの主への熱心を発見できるなら、グループは決してバラバラではありません。みんなで同じ行動を取ることがキリスト者の一致ではないのです。何のために、誰のために集まっているのか、目的における一致を確認して下さい。

次はひとりひとりがやりたいことを、グループ全体でやるべきかどうかを話し合ひます。やれたらよいことはたくさんあります。しかし一年間に行えることはわずかです。キリストを証しする方法にもいろいろあります。しかしグループ全体で何かを行うには、その中から取捨選択していかなければなりません。ある種のやり方を受け入れられない兄弟もメンバーの中に出てくるでしょう。グループが一致を保つには、そのことをメンバー同志でよく話し合ひ、祈り合ひ、

理解し合う努力が常に必要なのです。

また、グループの目的がすでに規約等に明文化されているならば、それを活動内容を選ぶ指針とするべきです。グループ全体の企画にはできないものも、有志でそれを行うことができます。ただしその企画をする人は、グループ本来の活動を邪魔しないように気をつけ、企画に参加しないメンバーにも内容を分かち合って、祈ってもらいようにしましょう。KGK活動は祈りによる献身のムーブメントです。ひとりひとりの活動の形は様々であっても、私たちはお互いが主に用いられるように祈り合うことができるのです。

教派が違うメンバーに違和感を感じてしまいます。自分とは信仰が違うような気がしてしまうのですが、彼らとどのような関係をとればいいですか。

彼らの信仰をもっと知る努力をして下さい。その教派の教理や歴史を学んでみましょう。また、あなたはできるだけ客観的になって、自分が感じている違和感の原因が何なのか考えて下さい。祈りの言い回しや賛美の仕方、表現のくせ、雰囲気等に、自分の習慣とのギャップを感じるだけならば、それは本質的な違いではありません。大切なのは聖書です。聖書が語っていることを信じ、従っているかどうかです。従い方を規定し裁き合うことは、聖書が勧めていることではありません(ローマ14章参照)。KGKは超教派の集まりですから、これまでの教会生活では出会わなかったようないろいろな人に会うことでしょう。彼らの信仰のあり方には、良い点も悪い点もあります。それはあなたの信仰にも言えることです。超教派の交わりは、聖書を間に置いて分かち合うならば、お互いの違いを通して福音理解を豊かにしていくのです。

しかしもしも聖書を基準とすることに同意できないメンバーならば、確かにその人とは信仰が違います。聖書の権威が無視されてしまったら、信仰の共通の土台がなくなり、伝道する内容も変わってきてしまいます。その場合には勇気を持って聖書信仰をもつメンバー同

志で新しいグループを作りましょう。人とのつながりよりも神とのつながりを大切にする集まりを保つべきです。そうしなければ、求める人に純粋な福音を伝えることができません。ぜひ主事に相談して下さい。

リーダーとして一生懸命に奉仕してきました。でもいろいろな問題が出てきて、もう疲れてしまいました。これからどうしたらいいのでしょうか。

リーダーには確かに責任が伴います。そして、主のしもべが忠実に奉仕する時に、悪魔の攻撃もまた強くなります。問題が起こることはどのグループにも避けられません。しかし、それらの問題は主が栄光を現わされるチャンスでもあります。同時に、あなたのガンバリが見栄や意地やプライドから出たものであるならば、あなたがへりくだり、悔い改めるべきときとなるでしょう。

いろいろな課題を自分一人で負わずに、グループのメンバーと祈りましょう。学内にどうしても祈り合えるメンバーがいなかったときには、他大学のリーダーと交わりを持つことはできないでしょうか。また、卒業した先輩や、教会の姉妹に祈ってもらえることもできるのではないのでしょうか。KGKの地区の集会やキャンプも、そのような交わりの機会になります。共通の問題を経験したことのある人がたくさんいるはずですよ。

自分ではどうしようもないときに、私たちは主に信頼することを学びます。あなたがその問題を解決できないからといって、あきらめないで下さい。脱出の道を与えるのは、リーダーではなく、主なのです(1コリント10:13)。

リーダーとして失敗してしまいました！このことが元になってメンバーの信頼も失いそうです。未信者のメンバーにもつまずきになるでしょう。リーダーをやめるべきでしょうか。

大切なのは、失敗しないことではなく、失敗した後どのような態度をとるかです。未信者の本当のつまずきになるのは、偽ったりごまかしたりすることであって、失敗そのものではありません。むしろ真実に悔い改める姿こそ、神を恐れる信仰者のモデルとなるのではないのでしょうか。あなたに必要なのは、謝り、悔い改める正直さと勇気です。やめるかどうかはその後で考えましょう。

メンバーと分かち合い、祈り合って、交わりを保ちましょう。謝罪した後で批判し続ける人がいても、怒ってはいけません。謙遜に受け取りましょう。そしてもしもあなたがリーダーであることがグループを混乱させるのなら、後を他のメンバーに引き継いでいさぎよくリーダーをやめましょう。ただ、リーダーをやめたあとそのままグループから離れてしまわないで下さい。あなたはリーダーという役割を退いただけであって、キリスト者としてグループのビジョンに同意しているれっきとしたメンバーの一員なのですから。そして、失敗さえも主は用いてあなたを次のステップに導いて成長させて下さるといふ恵みを、兄姉に証ししていただきたいのです。

メンバーのひとりと交際をすることになりました。グループの中でどんなことに気がつけたらいいですか。

相手がキリスト者の場合には、あなたたちの交際がオープンにさわやかに行われることが、他のメンバーにとってもよいことです。主がふたりの交際をきよく守り、祝福して下さるように祈ってもらおうようにしましょう。ただ、メンバーの中には、あなたたちの存在が刺激になって祈りやみことばから気がそれてしまう人もいますでしょうから、グループで集まるときには二人だけの世界に入らず、他の人への配慮を忘れないように気をつけて下さい。

求道者との交際はさらに祈りが必要です。恋愛感情は求道を後回しにさせやすいからです。キリスト者のあなたがよほど心して祈り、他の人にも祈られ、自分の信仰を整えられていかなければ、簡単に感情に流されてしまうでしょう。自分の目先の幸せよりも、相手の

永遠のいのちを優先させなさい。そのためにはいつでも別れられる心構えをしていなさい。それができないならば、あなたはその人ではなく自分を愛しているだけなのです。みこころに従えるように、ぜひ祈り支え合ってください。

次期のリーダーの選び方を教えてください。

まず、集会によく来るから、活発だから、何か奉仕をさせてあげたいから、立候補したから等々が、リーダーを選ぶ第一条件であってはなりません。また「あの人がいるからあの人がいい」というような場当たりの決め方はやめましょう。キリスト者リーダーとして最も重要なのは、神に信頼する信仰を持った人であることです。自己中心ではなく、神に従う奉仕を志すリーダーが必要なのです。また、今のこのグループにはどのようなリーダーが必要なのかを考え、メンバーと話し合ってみましょう。だれかひとりの主観的な判断ではなく、他のメンバーとも一致できるような客観的な規準を考えて下さい（Iテモテ3章参照）。そしてなるべく早い時期に、そのような働き人がグループに与えられるように祈り始めましょう。

リーダー候補と思われる人とは、意識的に顔と顔を合わせて交わりを持つようにしましょう。同性ならば泊まり掛けで話し合うこともできます。みことばを分かち合い、時間を共に過ごす中で、グループのビジョンを伝えていきます。そしていよいよリーダーをその人に依頼するときは「あなたに是非やってもらいたい」という理由を心から話して下さい。「簡単だよ、大丈夫だよ」と安易に頼むのはやめて下さい。むしろ、困難はあるかもしれないが主のビジョンをあなたにしっかり引き継いでほしいのだと、熱意を持って大胆にアプローチしましょう。

次のリーダーを選ぶことは、現リーダーの大きな仕事の一つです。今年よい働きをしたとしても、そのスピリットが継承されるかどうかは後継者選びでほとんど決まります。人が喜ぶようにではなく神が喜ばれるように後継者を選びましょう。

後輩はみんな頼りなくてまかせられません。卒業してからも私が学校に来てサポートをしようと思っていますが、どのように関わってあげればよいでしょうか。

その人がよいリーダーだったかどうかは、やめた後にわかるのです。グループがその人がいなくなった時にどうなるかが、リーダーの評価を決めます。あなたは人を育てるという大切な働きをなおざりにしてきたではありませんか。あなたの在学中の奉仕は本当にふさわしいものだったのでしょうか。これからの後輩のために必要なことで、あなたにできることは何でしょうか。あなたが学校訪問することが、本当に彼らを助けることになるのでしょうか。

卒業してからは、自分がやってきたことを後輩に押しつけるのではなく、彼らの考えを尊重して励ましてあげてください。あなたを導いた主が、今の彼らにも新しいビジョンを与えているのですから。あなたが彼らに分かち合うべきものは、手段や方法ではなく、神に信頼して従う、というスピリットです。学生社会しか知らない後輩たちに、卒業後もKGKスピリットを生き続けるすばらしさを証して下さい。そんなあなたを見ることで、後輩たちは自分の信仰にさらに豊かな確信を持つことができるでしょう。それがあなたのできる最も効果的な継承です。

母校のグループとコンタクトをとり続けるとともに、是非KGK卒業生会に入会してください。それによって、全国の学生伝道の情報を受け取り、彼らのために祈り、経済的に支援することができます。主事とともに、自分の母校だけでなくKGK運動の中のいろいろな学校のために、あなたの熱意と賜物を献げて下さい。

KGK しよう！ 学内活動シリーズ 3 リーダーシップ

初版 1998年6月27日
改訂版 2010年1月20日
発行者 キリスト者学生会主事会
発行所 キリスト者学生会
〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル3F
TEL. 03-3294-6916
FAX 03-3294-6050
e-mail office@kgkjapan.net
定価 100円